TADOKU JUNIOR　グリム童話　★★★☆☆ ふつう　870語

Old Sultan

年とったズルタン

Brothers Grimm (tr. Edgar Taylor & Marian Edwardes)（1823年の本）　**原文そのまま**　朗読：Bob Neufeld

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　年をとって歯もなくなったイヌのズルタン。主人に見すてられそうになり、友だちのオオカミに相談すると、オオカミはある作戦を考えてくれました。



A shepherd had a faithful dog, called Sultan, who was grown very old, and had lost all his teeth. And one day when the shepherd and his wife were standing together before the house the shepherd said, ‘I will shoot old Sultan tomorrow morning, for he is of no use now.’ But his wife said, ‘Pray let the poor faithful creature live; he has served us well a great many years, and we ought to give him a livelihood for the rest of his days.’ ‘But what can we do with him?’ said the shepherd, ‘he has not a tooth in his head, and the thieves don’t care for him at all; to be sure he has served us, but then he did it to earn his livelihood; tomorrow shall be his last day, depend upon it.’

Poor Sultan, who was lying close by them, heard all that the shepherd and his wife said to one another, and was very much frightened to think tomorrow would

be his last day; so in the evening he went to his good friend the wolf, who lived in the wood, and told him all his sorrows, and how his master meant to kill him in the morning. 'Make yourself easy,' said the wolf, 'I will give you some good advice. Your master, you know, goes out every morning very early with his wife into the field; and they take their little child with them, and lay it down behind the hedge in the shade while they are at work. Now do you lie down close by the child, and pretend to be watching it, and I will come out of the wood and run away with it; you must run after me as fast as you can, and I will let it drop; then you may carry it back, and they will think you have saved their child, and will be so thankful to you that they will take care of you as long as you live.' The dog liked this plan very well; and accordingly so it was managed. The wolf ran with the child a little way; the shepherd and his wife screamed out; but Sultan soon overtook him, and carried the poor little thing back to his master and mistress. Then the shepherd patted him on the head, and said, 'Old Sultan has saved our child from the wolf, and therefore he shall live and be well taken care of, and have plenty to eat. Wife, go home, and give him a good dinner, and let him have my old cushion to sleep on as long as he lives.' So from this time forward Sultan had all that he could wish for.

Soon afterwards the wolf came and wished him joy, and said, 'Now, my good fellow, you must tell no tales, but turn your head the other way when I want to taste one of the old shepherd's fine fat sheep.' 'No,' said the Sultan; 'I will be true to my master.' However, the wolf thought he was in joke, and came one night to get a dainty morsel. But Sultan had told his master what the wolf meant to do; so he laid wait for him behind the barn door, and when the wolf was busy looking out for a good fat sheep, he had a stout cudgel laid about his back, that combed his locks for him finely.

Then the wolf was very angry, and called Sultan 'an old rogue,' and swore he would have his revenge. So the next morning the wolf sent the boar to challenge Sultan to come into the wood to fight the matter. Now Sultan had nobody he

could ask to be his second but the shepherd's old three-legged cat; so he took her with him, and as the poor thing limped along with some trouble, she stuck up her tail straight in the air.

The wolf and the wild boar were first on the ground; and when they espied their enemies coming, and saw the cat's long tail standing straight in the air, they thought she was carrying a sword for Sultan to fight with; and every time she limped, they thought she was picking up a stone to throw at them; so they said they should not like this way of fighting, and the boar lay down behind a bush, and the wolf jumped up into a tree. Sultan and the cat soon came up, and looked about and wondered that no one was there. The boar, however, had not quite hidden himself, for his ears stuck out of the bush; and when he shook one of them a little, the cat, seeing something move, and thinking it was a mouse, sprang upon it, and bit and scratched it, so that the boar jumped up and grunted, and ran away, roaring out, 'Look up in the tree, there sits the one who is to blame.' So they looked up, and espied the wolf sitting amongst the branches; and they called him a cowardly rascal, and would not suffer him to come down till he was heartily ashamed of himself, and had promised to be good friends again with old Sultan.

あるひつじかいが、ズルタンという忠実なイヌを飼っていました。ズルタンはすっかり年をとって、歯が一本もなくなっていました。ある日、ひつじかいとおかみさんが家の前にいっしょに立っていると、ひつじかいが言いました。「ズルタンはもう役に立たないから、あしたの朝、鉄ぽうでうってしまおう。」けれども、おかみさんは言いました。「どうか、あのかわいそうな忠実な生き物を生かしておいてやってください。長い年月、わたしたちのためによくはたらいてくれたのですから、死ぬまで食べさせてやるべきですよ。」「だけど、あいつをどうしろって言うんだ？」とひつじかいは言いました。「歯は一本もないし、どろぼうたちもちっともこわがらない。たしかにはたらいてはくれたが、それは自分が食べていくためだったんだ。いいか、あしたがあいつの最後の日だぞ。」

かわいそうなズルタンは、すぐそばにねそべっていて、ひつじかいとおかみさんの話をすっかり聞いてしまいました。そして、あしたが最後の日になると思うと、とてもこわくなりました。そこで夕方、森に住んでいる親友のオオカミのところへ行って、悲しいことをすっかり話し、主人があしたの朝自分の命をうばうつもりだと打ち明けました。「安心しなよ。」とオオカミは言いました。「いいことを教えてやろう。知ってのとおり、きみの主人は毎朝とても早く、おかみさんといっしょに畑へ出かけるだろう。そして小さな子どもをつれていって、仕事をしているあいだ、生けがきのうしろの日かげにねかせておく。そこで、きみはその子のすぐそばにねそべって、子守りをしているふりをするんだ。おれは森から出ていって、その子をくわえてにげる。きみはできるだけ速くおれを追いかけてくる。そうしたらおれは子どもを落とすから、きみがその子を運んで返すんだ。そうすれば主人たちは、きみが子どもを助けたと思って、とても感謝して、きみが生きているかぎり大事にしてくれるさ。」イヌはこの計画がとても気に入りました。そして、そのとおりに事が運びました。オオカミは子どもをくわえて少し走りました。ひつじかいとおかみさんは悲鳴を上げましたが、ズルタンはすぐにオオカミに追いつき、かわいそうな小さな子を主人とおかみさんのところへ運んで返しました。するとひつじかいはズルタンの頭をなでて言いました。「年とったズルタンが、オオカミからうちの子を助けてくれた。だから、ズルタンは生かしておいて、大事にして、食べ物もたっぷりやろう。おまえ、家に帰って、ズルタンにうまいごはんをやってくれ。それから、生きているあいだはずっと、わたしの古いクッションの上でねかせてやるんだ。」こうしてそれからというもの、ズルタンはほしいものを何でももらえるようになりました。

まもなく、オオカミがやってきてお祝いを言いました。そしてこう言いました。「さて、相棒、おれが年とったひつじかいの立派な太ったヒツジを一頭味見したくなったら、告げ口しないで、そっぽを向いていてくれよ。」「だめだ。」とズルタンは言いました。「ぼくはご主人をうらぎらないよ。」けれどもオオカミは、ズルタンがじょうだんを言っているのだと思って、ある夜、ごちそうをいただきにやってきました。ところがズルタンは、オオカミのたくらみを主人に話しておいたのです。そこで主人は納屋の戸のうしろでオオカミを待ちぶせしていました。オオカミがよく太ったヒツジをさがすのにむちゅうになっていると、主人はがんじょうなこん棒で、オオカミのせなかをいやというほどたたいてやりました。

するとオオカミはひどくおこって、ズルタンのことを「この、年寄りの悪党め」とよび、かならずしかえしをしてやるとちかいました。そこでつぎの朝、オオカミはイノシシを使いに出して、森へ来て決着をつけるために戦えと、ズルタンに決とうをもうしこみました。ところがズルタンには、ひつじかいの年とった3本足

のネコのほかに、かいぞえ人をたのめる相手がいませんでした。そこでネコをつれていきました。かわいそうにネコは足を引きずりながら、やっとのことで歩いていましたが、そのときしっぽを空に向かってぴんと立てていました。

オオカミとイノシシが先に戦いの場に来ていました。敵がやってくるのを見ると、ネコの長いしっぽが空にぴんと立っているので、ズルタンが戦うための剣を運んでいるのだと思いました。そしてネコが足を引きずるたびに、自分たちに投げつける石を拾っているのだと思いました。そこで二ひきは、こんな戦い方はごめんだと言って、イノシシはしげみのうしろに横になってかくれ、オオカミは木の上にとびあがりました。ズルタンとネコはまもなくやってきて、あたりを見まわし、だれもいないのでふしぎに思いました。けれどもイノシシは、すっかりかくれきれていませんでした。耳がしげみから飛び出していたのです。イノシシが耳を少し動かすと、ネコは何かが動くのを見て、ネズミだと思ってとびかかり、かみついたりひっかいたりしました。イノシシはとびあがってブーブー鳴き、「木の上を見ろ、悪いのはあそこにいるやつだ。」とさけびながらにげていきました。そこでみんなが見上げると、枝のあいだにオオカミがすわっているのが見えました。みんなはオオカミをおくびょう者とよび、オオカミがすっかりはずかしくなって、また年とったズルタンと仲よくすると約束するまで、木からおりるのをゆるしませんでした。

たんご と クイズ 年とったズルタン

dog イヌ	**teeth** 歯	**wolf** オオカミ
cushion クッション	**sheep** ヒツジ	**boar** イノシシ
tail しっぽ		

Q1 **オオカミの作戦は、どんなものだった？**

① ズルタンにヒツジをぬすませる　② 子どもをさらったふりをして、ズルタンに助けさせる

③ 主人をおどかす

Q2 **ズルタンが、オオカミにヒツジをとらせなかったのは、どうして？**

① 主人をうらぎりたくなかったから　② ヒツジが好きだったから　③ オオカミがきらいになったから

Q3 **オオカミとイノシシは、ネコのしっぽを何だと思った？**

① ほうき　② 旗　③ 剣

こたえ

Q1 ② オオカミが子どもをくわえてにげ、ズルタンが追いかけて取りもどすという作戦です。主人はズルタンに感謝しました。

Q2 ① ズルタンは「ぼくはご主人をうらぎらないよ」と言って、オオカミのたくらみを主人に知らせました。

Q3 ③ ぴんと立ったネコのしっぽを、ズルタンのための剣だと思ってこわくなり、かくれてしまいました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #2591（Brothers Grimm (tr. Edgar Taylor & Marian Edwardes)、1823年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Bob Neufeld（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。